

烏頭湯・烏頭桂枝湯

【処方構成】

烏頭湯：麻黄 3 芍薬 3 黄耆 3 甘草 3 烏頭適宜

烏頭桂枝湯：桂枝 4 芍薬 3 大棗 4 甘草 2 生姜 0.5 烏頭適宜

【原典】『金匱要略』

『外臺祕要方』、『備急千金要方』においては、烏頭桂枝湯が烏頭湯となっている。

寒疝腹中痛。逆冷。手足不仁。若身疼痛。灸刺諸藥不能治。抵當烏頭桂枝湯主之。○千金。無抵當字。

烏頭○原本。缺枚數。千金。外用五枚。外臺。用十枚。

烏頭桂枝湯方

右一味。以蜜二斤。煎減半。去滓。以桂枝湯五合解之。令得一升後。○千金。後作許。初服二合。不知即服三合。又不知復加至五合。其知者如醉狀。得吐者爲中病。

桂枝湯方

桂枝三兩 芍藥三兩 甘草二兩 生薑三兩 大棗十二枚
去滓 炙 炙 炙 炙 炙
右五味。剉。以水七升。微火煮取三升。去滓。

〔訓〕

寒疝、腹中痛み、逆冷して手足不仁す。若し身疼痛し、灸刺、諸薬にて治する能わずんば、抵當烏頭桂枝湯之主。○千金には抵當の字なし

烏頭桂枝湯の方

烏頭（原本には枚数を欠く。千金は五枚を用い、外台は十枚を用う）

右一味、蜜二斤を以て煎じて半を減じ、滓を去り、桂枝湯五合を以て之を解き、一升を得せしめて後（千金、後を許に作る）、初め二合を服し、知らずんば即ち三合を服す。又知らずんば復加えて五合に至る。其の知る者は酔状の如く、吐を得る者は病に中ると為す。

桂枝湯の方

桂枝（三兩、皮を去る）、芍薬（三兩）、甘草（二兩、炙る）、生薑（三兩）、大棗（十二枚）
右五味、剉み、水七升を以て、微火にて煮て三升を取り、滓を去る。

烏頭湯方。治脚氣疼痛不可屈伸。

麻黄 芍薬 黄耆各三 甘草炙 川烏五枚
煎取一升。即出烏頭。

右五味。咬咀四味。以水三升。煮取一升。去滓。内蜜煎中。更煎之。服七合。不知盡服之。

〔訓〕

烏頭湯の方は、脚氣疼痛、屈伸すべからざるを治す。

麻黄、芍薬、黄耆（各三兩）、甘草（炙る）、川烏（五枚。咬咀し、蜜二升を以て煎じて一升を取り、即ち烏頭を出す）。

右五味、四味を咬咀し、水三升を以て、煮て一升を取り、滓を去り、蜜煎中に内れ、更に之を煎じ、七合を服す。知らざれば尽く之を服す。

めんげんは 酔、たよくなる。

烏頭桂枝湯による瞑眩の一例

千葉 藤平 健

論 説

Aconite 根 (烏頭・附子) 中毒に関する
文献的考察

第2篇 主として服用法過誤による中毒例とその処置について

東京医科大学薬理学教室 (主任: 原 三郎教授)

矢 数 四 郎 (道 明)

原 著

生薬烏頭の減毒処理実験について

大阪大学薬学部 高橋真太郎・西野美都子

附子中毒の2症例

福 田 佳 弘* 勝 田 正 泰**

附子の中毒研究序説

東 京 龍 野 一 雄

附子の毒力について

小 島 喜 久 男

(鹿児島大学医学部薬理学教室)

共同研究者

藤崎 正・柴 義文・細川 良三・古賀俊一郎・平島 一義

銚之原卓郎・宇都宮 實・長島 真至

傷寒論、太陽病下編、大陷胸丸の方後に、禁如薬法の四字
がある。私は久しく、この四字の讀法を會得せず、傷寒論の
註釋本に就いて、之を調べて、満足な解が得られなかつた。
即ち山田正珍の傷寒論集成、川越徳山の傷寒論脈證式では、
大陷胸丸の一條を後世人の摺入であるとして、一切の註釋
を避けてゐる。また橋南翁は傷寒論分註に於て、禁如薬法の
四字は未だ考へずと云ひ、及川東谷の傷寒古訓傳、齊藤齊の
傷寒論特解、中西深齋の傷寒論辨正、淺田宗伯の傷寒論識等
に於ても、この四字に就いて言及するところがない。また多
紀元簡の傷寒論註義に於ても、成無己以下三十名に近い中非
に於ける傷寒論の註釋家の説を擧げて、之を考證してゐるに
拘らず、この四字に就いては一言も述べるところがない。昨
年初夏の間、山田業廣の九折堂讀書記を得て、之を讀むに、
次の如き考證があり、始めて禁如薬法を察して薬法の如く

……附子の瞑眩説に就いて……

禁 如 薬 法

大 塚 敬 節

せよ」と讀むべきであることを知つた。

禁如薬法 按察痼疾、見禮記編衣藥人以行注、證文價謹
也謹慎也讀慎五訓、千金翼卷五婦人門、紫石天門各圖
方後云、慎如薬法、外臺卷五、崔氏常山散方後、慎如
薬法、又卷十八脚氣不隨方、引崔氏小飲子法、方後云、
慎如薬法、乃孫慎普異而謹明通、千金方卷二十四脫肛
門、治肛出方後云、慎如薬法、重及急帶衣、醫心方卷七引
慎作藥、可以微察謹慎五和通用也。

その後昨年十二月になつて、柳田子知の傷寒論釋解を得て
之を讀むに、禁如薬法の下に「劑を作るに薬法の如くせざれ
ば、必ずその効なきを戒しむるなり」と云々と註解してあるの
を讀み、大いに裨益されることがあつた。私の今日までの
見聞に於ては、禁如薬法を解し得たものは、右の二家につき

表2 開花期における野生品トリカブトの子根の定量(%)

試料	測定法	H P L C 法			
	T-Al.	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
青森	1.48	0.277	0.198	0.007	0.482
青森	1.81	0.394	0.181	0.012	0.587
青森	1.76	0.156	0.313	0.006	0.475
福島	1.56	0.250	0.299	0.005	0.554
新潟	2.02	0.231	0.106	0.099	0.436
新潟	1.72	0.204	0.306	0.061	0.571
群馬	1.68	0.138	0.282	0.077	0.497
ハナトリカブト	0.79	0.032	0.214	0.038	0.284

表3 市場品「烏頭」の定量(%)

試料	測定法	H P L C 法			
	T-Al.	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
A社 烏頭(草)	1.08	0.010	0.134	0.183	0.327
A社 烏頭(草)	1.21	0.043	0.193	0.067	0.303
A社 烏頭(草)	0.88	0.004	0.070	0.125	0.199
A社 烏頭(草)	0.82	0.010	0.013	0.048	0.071
B社 烏頭(草)	0.69	0.003	0.009	0.034	0.046
B社 烏頭(草)	0.82	0.003	0.013	0.038	0.054
制草頭 (上海中医学院)	0.65	0.003	0.023	0.015	0.041
制川烏 (上海中医学院)	0.70	0.001	0.009	0.007	0.017

表4 市場品「附子」の定量(%)

試料	測定法	H P L C 法			
	T-Al.	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
A社 附子	0.54	0.001	0.004	0.008	0.013
A社 修治附子(草)	0.98	0.005	0.008	0.003	<0.016
C社 修治附子(草)	0.77	0.002	0.005	0.002	0.009
C社 修治附子(草)	0.76	0.003	0.001	<0.001	<0.005
D社 加工ブシ末	0.71	0.004	0.007	0.005	0.016
D社 加工ブシ末	0.70	0.006	0.007	0.002	0.015
E社 修治ブシ末	0.73	0.001	0.005	0.005	0.011
E社 修治ブシ末	0.73	0.003	0.004	0.005	0.012

烏頭・附子類の市場品の現状

佐橋 任郎

草烏頭

表5 市場品の炮附子類の定量(%)

試料	測定法	H P L C 法			
	T-Al.	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
A社炮附子(日産)	0.48	<0.001	0.001	0.002	<0.004
A社炮附子(中国産)	0.14	<0.001	<0.001	0.002	<0.004
B社炮附子(中国産)	0.18	0.001	0.001	0.003	0.005
黒附片 (香濃市場品)	0.06	<0.001	0.001	<0.001	<0.003
白附片 (香濃市場品)	0.07	<0.001	<0.001	0.001	<0.003
制附片 (上海中医学院)	0.05	<0.001	<0.001	<0.001	<0.003
制附片 (上海中医学院)	0.06	<0.001	0.001	<0.001	<0.003

表6 煎液中の総アルカロイド量

試料	1g中のT-Al. (mg)	煎液中 (mg)	移行率 (%)
A社烏頭(草)	10.10	5.87	58.1
A社修治附子(草)	9.79	5.36	54.7
D社修治附子(草)	7.62	4.46	58.5
炮附子(日産)	4.78	2.76	57.7
炮附子(中国産)	1.42	0.98	69.0

表7 煎液中のアコチニン系アルカロイド量

試料	各アルカロイド	1g中の含有量 (mg)	煎液中 (mg)	移行率 (%)
	A社 烏頭(草)	Acco.	0.093	0.009
Mesa.		1.153	0.039	3.38
Hypa.		1.812	0.538	29.69
自家製生附子	Acco.	1.185	0.094	7.93
	Mesa.	1.482	0.046	3.10
	Hypa.	0.093	0.026	27.96

表8 薬方別残存量と残存率

薬方名	薬方中の烏頭1g相当の含有量 (mg)			
	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
四逆湯	0.004	0.041	0.576	0.621
	(4.30)	(3.56)	(31.79)	
四逆加入参湯	0.004	0.031	0.482	0.517
	(4.30)	(2.09)	(26.60)	
茯苓四逆湯	0.006	0.028	0.547	0.581
	(6.45)	(2.43)	(30.19)	

()内は%

表9 加工ブシ末、修治ブシ末の各アルカロイド量

試料	1g中の含有量 (mg)			
	Acco.	Mesa.	Hypa.	計
D社加工ブシ末	0.055	0.051	0.024	0.130
D社加工ブシ末	0.032	0.058	0.061	0.151
D社加工ブシ末	0.061	0.068	0.023	0.152
E社修治ブシ末	0.026	0.043	0.046	0.115
E社修治ブシ末	0.013	0.050	0.054	0.117

11. 烏頭湯（うづとう）

この方は関節がはげしく痛んで屈伸のできないものに用いる。浅田宗伯は勿誤薬室方函口訣の中で、次のようにのべている。

『この方は歴節（関節が次々と痛む病氣）の劇症に用いて速効がある。また白虎風（関節の腫れて痛む病氣）の痛みの甚しいものにも用いる。白虎風のことは聖濟総録に詳しく出ている。この方の目標は、屈伸すべからずである。一婦人が臂の痛みを訴え、昼夜泣きわめくほどはげしく、屈伸することができないというものに、烏頭湯を与えたところ、たちまちよくなった。』
『また天野柳庵は年は60歳あまりであるが、腰痛を患い、両脚がそのために屈伸ができず、仰臥したきりで起ることができない。衆医は疝として治療したが効がないという。そこで烏頭湯を与えたところ、数日で痛が全くとれた。ところで両脚の筋肉が萎縮して屈伸することがむづかしい。よって大防風湯に化毒丸を兼用したところ徐々によくなった。』

烏頭湯は関節の疼痛ばかりでなく、寒疝で腹が絞られるように痛み、寝返りができないほどにひきつれるものにも用いることになっているが、私はまだこのような腹痛に用いたことはない。

私は最近関節リウマチで疼痛がはげしく、夜間眠れないというものに、種々の治療を施したが効なく、ついに、意を決して烏頭湯を与えたところ、初めて著効があって、疼痛が軽減した。ところが、これを用いると関節の疼痛は軽くなる反面、はげしい頭痛と悪心が起って、続服できかねるといふ。これは烏頭の中毒症状であると考えたので、初めの1日分1.2の烏頭を、1.0に減じ、0.8に減じたが、依然として頭痛が去らない。

そこでこれはあぶないと考えて、甘草附子湯とした。このさい附子は0.8としたが、頭痛は起らず、関節の疼痛もやや軽快したという。

さて、烏頭は附子の母根で、附子はこの母根に付着した子であるが、今日一般に漢薬店で売っている白川附子と称するものは、すべて烏頭である。そこで、私が烏頭湯のときに用いた烏頭も、甘草附子湯のときに用いた附子も、同じ白川附子であった。そこで烏頭湯を用いたさいのはげしい頭痛と悪心は、烏頭のせいだけではなかったらしい。烏頭や附子の中毒については、烏頭桂枝湯の方後に“その知る者は酔状の如し。吐を得る者は病にあたるとなす”といい、これを和久田寅は次のように説明している。

『烏頭の量は少なくとも悪寒がしたり、からだがかじりたり、口に山椒をかむようなシビレがきて、吐きそうになり、起きあがろうとするとめまいがくる。多量をのんだ時は、からだがかげ、冷汗が流れ、吐いたり下したりして、脈は沈んでふれなくなり死んだようになる。その軽い場合は1、2時間、重い時は半日ばかりでさめる。この薬は瞑眩を起すから慎重に扱わねばならない。万一瞑眩を起した時は、おどろいて妄りに他の薬を与えてはいけない。またあわてて火であたためてもいけない。静かにしてさめるをまつがよい。さめてあとで吐くものもあり、瞑眩のさいに嘔吐と下痢が同時にくることもある。たださめてのちに渴してのみたがるなら、冷水を与えて、様子を見るがよい。もし誤って烏頭、附子の毒にあたるものは、みそ汁を飲むか、黒豆甘草湯（大黒豆と甘草の煎汁）をのむか、または乾姜甘草湯をのむがよい。』

以上は烏頭、附子の中毒症状とその手当をのべたものであるが、これの中毒で痙攣を起し、次に呼吸麻痺を来して死ぬものもあるから、これらの薬物の使用は慎重でなければならぬ。しかし附子は効験の顕著に現われる良薬であるから、これをおそれて用いないようでは、起死回生の偉効を失する場合も起り得るのである。だから古人も、附子と大黃を上手に用いるようになれば名医の仲間入りができたようなものだといっている。

12. 烏頭桂枝湯（うづけいしとう）

この方は烏頭煎と桂枝湯との合方で、金匱要略には、寒疝で腹が痛み、からだ中が冷え込み、手足が麻痺し、またはからだ痛み、灸をしたり、針をしたり、いろいろの薬を用いたりしても、治すことのできないものは、烏頭桂枝湯の主治である、とその治療の目標を示している。

用方経験では、この方の用法を次のようにのべている。

『わが子乾先生は、しばしばこの方を用いて、瘰癧で瘻人になったものや、腰脚がひきつれていたり、屈伸したり、寝返りしたりすることのできないもの、または脚の心が割れるように痛み、筋脈が断折してたえられないように痛むものなど、いろいろの薬で効のないもの及びいざりて疼痛のあるものを治した。しかし大腿部から下にかけて筋肉が萎縮しているものは治らない。この薬はみだりに与えてはいけない。瞑眩を起して死にそうになる。少し誤れば必ず死期を促すことになる。死んでからでは、針灸も薬も救うことはできない。』

烏頭桂枝湯の煎じ方は、始め烏頭だけを蜂蜜で煎じ、かすをこしてから、桂枝湯の煎汁を混合してからのむことになっているが、烏頭湯の場合のように、烏頭その他の薬を全部一度に水で煎じてかすをこし、次に蜂蜜を入れてとかしてから呑んでもよい。蜂蜜を入れることを忘れると、中毒症状が起りやすいから、おろそかにしてはいけない。有持桂里は脈の緊または沈のものに、烏頭湯を用いれば百發百中であるが、洪数のものには効がない。効がないばかりか反ってわるくなることがある。洪数は統命湯を用いる脈であるとのべている。

13. 桂枝加附子湯（けいしかぶしとう）

この方は桂枝湯に附子を加えたもので、烏頭桂枝湯とその組成はよく似ている。ただ附子の量が少なく、蜂蜜が入らない。この方が冷え症の腹痛に用いられることについては、腹痛の項でのべたが、また四肢の疼痛にも用いられる。その疼痛は、烏頭湯や烏頭桂枝湯の場合のようにはげしくない。またこの方に朮を加えて、桂枝加朮附湯としても用いる。

この方を四肢の疼痛に用いるのは、傷寒論に“太陽病を發汗したところ、それからひきつづいて汗がもれやまず、悪風を訴え、小便が出にくく、四肢が少しつれて屈伸するのに骨の折れるのは、桂枝加附子湯の主治である。”というところにヒントを得たのである。

豊浦遺珠の中から治験を引用してみよう。

『一男子、41歳、4、5年前から、膝が少し痛んだ。しかし年中痛むのではなく、時々起る程度であった。ところが今年になって、両方の膝が痛むようになった。右は軽くて左はひどい。膝の痛むときは、胸の方も冷えて痛む。また左の肩背がこって、シビレ感があり、腹筋は拘攣し、右胸下に痞硬があり、左膺傍に停水があって鳴る。頭汗があり、呼吸促迫の気味もあり、脈は弦数である。先生はこれを診察して、千金方の半夏湯の証に似ているが、これはきつと桂枝加附子湯の証であろうと、これを与えたところ、数服のんだだけで全治した。』

4. 桂枝加附子湯（けいしかぶしとう）・烏頭桂枝湯（うづけいしとう）

附子や烏頭の入っている薬方には寒冷を目標にして用いるものが多い。桂枝加附子湯も、冷え症で、夏でも足袋をはかないと板の間を歩けないとか、足が冷えると腹がはって痛むなどというものに用いる。津田玄仙は、疝による腹痛には、この方の応ずるものが多いとしている。

烏頭桂枝湯は、金匱要略に“寒疝、腹中痛、逆冷、手足不仁、若し身疼痛灸刺、諸薬治する能はざるは、烏頭桂枝湯之を主る。”とあるによって、手足がひどく冷え、あるいは麻痺して、腹が痛んだりからだに疼痛を訴えたりするものを治すのである。

この2方はその証が大同小異で、烏頭桂枝湯の方が症状がはげしい。

烏頭桂枝湯

烏頭ニ莖

右以水六勺者取二勺去滓

蜜四分煎取四勺作桂枝湯二分合服之此方腹中拘

痛シ手足逆冷或ハ不仁又ハ身疼痛スルヲ治スルナリ此

方ヨク背脊ニ中ル時ハ水ヲ二三升モ吐出シ氣絶スルヲア

リヨク其症ヲ審ニシテ用ル寸ハ病根ヲ除カズト云フナシ一

男子年四十三數年疝氣ヲ之へ腰冷テ水中ニ坐スルガ如

シ大抵海狗必ズ一発ス癸ス寸ハ臍腹大ニ痛手足ヒズ

リ屈伸スルヲ多ス此方ヲ多ヘル二十劑ニシテ病者大ニ水

ヲ吐シ病大半ヲ減ズ更ニ控涎丹ニテ下シテ全ク愈ナリ

○一男子年五十五半身不遂口眼カニ言語ナリ手足フ

ルリ余此方ヲ多ヘテ水ヲ吐キ大ニ困倦ス家人驚駭ス余曰

畏カラス是藥ノ瞑眩スルナリト後諸症悉ク除テ全効ヲ

収ム

十口方便覽

六角重伍

烏頭湯

麻黄

芍薬

黄耆

甘草各六分

烏頭一分三分以蜜六分煎取三分右五味以水九分煮四味取三分去滓

内蜜煎中更煎和服之所謂痛風脚氣疝氣鶴膝風半身不

遂等ノ症ニ平水丸七宝丸十惠湯紫圓ノ類ヲ擇ヒテ兼

用スヘシ○微毒ノ骨痛ニ常ニ毎夜芍黄散ヲ用ヒ時

時梅肉散ニテ下シ後ニ七寶丸ヲ用フベシ

古方慢筆

原信成

烏頭湯 寒疝腹中絞痛賊風腹ニ入テ五藏ヲ攻

メ拘急シテ轉側スルコトヲ得ズ發作時アリ

或ハ陰縮手足厥逆スルヲ治ス

烏頭 十五枚 芍薬 四兩 甘草 二兩 桂心 六兩

生姜 一斤 大棗 十枚

右六味煮服服後醉ル狀ノ如キヲ知ルトス○

右即チ烏頭桂枝湯ノ方ナリ今劇症ニ臨テ製

シ易キヲ取ルガ故ニ外臺ノ方ニ从フ時ニ臨

テ烏頭桂枝湯ノ煎法ニ从ヒ用フベシ

○烏頭桂枝湯 寒疝腹中痛逆冷手足不仁若身疼痛發刺諸藥不能治此方主之

烏頭 千金十九枚 要略五枚

右一味以蜜二斤煎減半去滓以桂枝湯五合解之得一斤後初服二合不知即服三合又不知復加至五合其效如醉狀得吐者為中病

按スルニ寒疝腹中痛テ逆冷シ手足不仁テ身体疼痛スル者此寒疝ノ重キモノ也灸刺諸藥効ヲ取ルテ能ハス急ニ烏頭煎ヲ以テ桂枝湯ヲ加ヘテ以テ内外ノ重寒ヲ温散スルモノ也烏頭煎ハ熱藥也能腹中ノ寒痛ヲ散ス桂枝湯ハ

表藥也能外邪身痛ヲ治スニ方相合スルトキハ能臟腑ニ達シ血氣ヲ和シ寒疝其脈弦緊ニシテ痛甚者此方ヲ用ヒテ大ニ効アリ此方ヲ服メ後醉ヘル狀ノゴトク一身體痺ノ甚時ハ吐シ脈モ亦不出殆ト死セント欲ス形ノ如シ此病ニ中レリトス然ルニ見ル人甚恐レラナシ反テ此藥ヲ用ヒテ醫ヲ死ニテ

他醫ヲ招キ治ラセ者アリ其醫來テ解テ能ハズ之鹵莽トシ藥ヲ與フ果ノ暫アツテ夢ノ醒ルカゴトク次第ニ快ヨナリテ本病治スルアリ此煎前醫ノ功ニ因テ病愈ルヲ得テ遂ニ功ヲ後醫ニ收レテ反テ處ヲ前醫ニ歸スルアリ

故ニ其意ヲ得タル人ニ非ズンバ妄ニ用ヒカラス扱又此方烏頭ヲ蜜ニテ煎シ滓ヲ去リ其煎汁ヲ用ユル也蜜ハ烏頭ノ大熱毒ヲ制スト云然ニ蜜煎ニセズノ用ユル時ハ其功少ク醉ヘル如ク麻痺スルモノナシ此蜜ニテ反テ烈シクナル快予未決之

古方野義 内島保定

464、脚氣にて、痿弱して起立し能わず、麻痺殊に甚だしく、諸鳥附効なき者に此の方宜し。

465、痛風にして、百節疼痛腫起し、及び偏枯、癱瘓、結毒にして、骨節酸疼し、或は隆起する者を治す。俱に七宝承氣丸、十乾承氣丸を兼用す。

466、痘瘡にして、起脹貫膿し、其の勢振わず、灰白内陥し、下利して、身冷し寒戦咬牙し、掉頭止まざる者を治す。

467、癰疽にして、累日膿潰せず、堅硬にして疼痛忍ぶべからざる者、已に潰後、毒氣凝結し、腐蝕して復せず、新肉生じ難き者、附骨疽、癰瘡にして癰膿尽きざる者、年久しく微毒沈滞して動かざる者、併せて之を主る。七宝、十乾、梅肉を宜に随って兼用すべし。又薑葉を用うべき者あり。

45、陶弘景曰く、附子、烏頭若干枚は、皮を去り畢り、半兩を以て一枚に準ず、と。古人用うる所の烏、附は皆野生にして培植の品にあらず。然るが故に（故に然り）、今一枚を以て一兩に準じ、分量に註す。按ずるに、後に千金には、許りと作る、是なり。

46、知るを以て度となすは、靈樞客邪篇に見る。楊子方言に曰く、知とは愈なりと。此の条の知るとは臍腹を謂うなり。

47、按ずるに、身疼痛は千金には一身尽く痛むに作る。抵当の二字なし。俱に是なり。

48、寒疝とは臍を繞りて痛み、上つて心胸に連なり、下つて陰囊に控え、苦楚（苦痛）忍ぶべからず。手足逆冷し、冷汗流るる如き者は、此の方にあらざれば救う事能わざるなり。

49、疝は水毒なり。其の発するは多く外感より来る。然して或は瘀血を兼ねて作す者あり。或は蚊虫を挟みて動ずる者あり。或は宿食に因り発する者あり。処療の際よろしく飄弁（飄葷の大を弁別する）して手を下すべし。

50、東洞先生は、煎法は大烏頭煎の法に従うべしと曰う。然れども余は毎に本論の煎法に従い、唯分量と服度に意を以て裁断するのみ。

骨節疼痛し、屈伸すべからず。及び腹中絞痛し、手足厥冷する者を治す。麻黄芍薬黄耆甘草各三兩（六分）川烏五枚（一錢）咬咀し、蜜二升を以て、煮て一升を取り、即ち烏頭を出す。（蜜六勺を以て、煮て三勺を取る。）

右五味、四味を咬咀し、水三升を以て、煮て一升を取り、滓を去り、蜜を煎中に内れ、更に之を煎じ、七分を服す。知らずんば尽く之を服す。（水一合八勺を以て、四味を煮て六勺を取り、滓を去り、蜜を煎中に内れ、更に煎じて六勺を取りて服す。）

○「臍節を病み、」屈伸す可からず。疼痛するは、（本方にて主治す。）

○「脚氣。」疼痛して屈伸すべからざるは、（本方にて主治す。）

○「寒疝」腹中絞痛し、「賊風入つて五臟を攻め、」拘急して転倒し得ず。発作時有り。人をして陰縮あり。手足厥逆せしむ。（本方にて主治す。）
為則按ずるに、当に自汗、盜汗、浮腫の証あるべし。

一一、烏頭桂枝湯

腹中絞痛し、手足逆冷し、或は不仁となり、或は身疼痛する者を治す。

烏頭五枚

右一味、蜜二斤を以て、煎じて半に減じ、滓を去り、桂枝湯五合を以て、之を解き、一升を得て後初め二合を服す。知らずんば、即ち三合を服す。又知らず。復に加えて五合に至る。其の知る者は醉状の如し。吐を得る者は、病に中ると為す。

○「寒疝は、」48、腹中痛み、逆冷し、手足不仁す。若し身疼痛し47、灸刺諸薬、治する能わざるは、抵当に此の方を用う。

為則按ずるに、是れ烏頭煎にして、桂枝湯を合したる方なり。当に烏頭煎の下方に列すべし。今之を桂枝加附子湯に列するは、其の異を示すなり。又按ずるに、煎法は大烏頭煎の法に依るべし。（烏頭三錢、右一味、蜜一合一勺を以て煎じて半に減じ、桂枝湯六勺を以て、之を

烏頭湯金 按總部不能屈伸者亦脚氣疼痛不可屈伸 貴故 一貫 廿二 烏頭 均案各

按總部不能屈伸者亦脚氣疼痛不可屈伸 貴故 一貫 廿二 烏頭 均案各

一貫 廿二 烏頭 均案各

烏頭桂枝湯 寒疝腹中逆冷手足不仁若身疼痛
灸刺諸藥不能治抵當用此方

烏頭五枚

右一味以蜜二斤煎減半太滓以桂枝湯五合解
之得一升後初服二合不知即服三合又不知復

加至五合其知者如醉狀得吐者為中病○試効

治一切逆冷不仁痿痺等證 ○方意 蓋烏頭之為能運動寒固

令烏頭之氣順達患窠也類聚方集覽曰烏頭之
得痿猶龍之得雲感應靈效如神者妄誕也夫古
人以蜜煎烏頭者欲緩其剛悍之氣以令不奔逸而已

烏頭湯 病歷節不可屈伸疼痛○脚氣疼痛不可

屈伸○寒疝腹中絞痛拘急不得轉側發作有時
使人陰縮手足厥逆

麻黃 芍藥 黃耆 各三兩 甘草 三兩

烏頭五枚煎取一升即出烏頭

右五味咬咀四味以水三升煮取一升太滓內蜜

煎中更煮之服七合不知盡服之○試効四肢百節疼痛

如虎咬者此名歷節風此方神驗
又治脚氣一身悉痛或四肢痺者 ○方意 烏頭芍
其毒麻黃黃耆著扇散之張珣王曰烏頭以蜜煎取
緩其性使之留連筋骨以利其屈伸壽按蓋烏頭
得蜜奔氣沈着故仲景氏之使用烏頭也必以蜜
煎之令其剛悍之氣不奔逸是古人用藥妙處

烏頭湯

此方ハ歴節ノ劇症ニ用テ速効アリ又白虎風痛甚キニ
モ用ユ白虎風ノ事ハ聖濟總錄ニ詳ナリ不可屈伸ト云
カ目的ナリ一婦人臂痛甚ク不可屈伸晝夜號泣衆醫治
テ盡メ治スル能ハス余此方ヲ用テ速ニ治ス又腰痛數
年不止尙儂セントスル者少翁門人中川良哉此方ヲ用
ヒ腰ニ芫菁膏ヲ貼メ全治ス青洲翁ハ囊癰ニ用テ効ヲ
奏セリ此方ハ甘草分量少ナク且蜜ヲ加サレハ効ナシ
此二味能血脉ヲ和シ筋骨ヲ緩ムルナリ

烏頭桂枝湯

此方ハ寒疝ノ主劑也故ニ腰腹陰囊ニカケ苦痛スル者
ニ用ユ後世ニテハ附子建中湯ヲ用レヒ此方蜜煎ニシ
タル方カ速効アリ又失精家常ニ腰足冷テ臍腹力ナク
脚弱ク羸瘦腰痛者此方及大烏頭煎効アリ証ニ依テ鹿
茸ヲ加エ或ハ末トシ加入スルモ佳アリ